

おしえて！エコチル先生、今回は、「エコチル調査へのメッセージ」をテーマに、日本科学未来館科学コミュニケーション専門主任の、森田由子（もりた・ゆうこ）先生に、お話を伺いました。

- ー 森田先生は、日本科学未来館の科学コミュニケーターとのことですが、ふだんはどのような活動をされているのでしょうか？

日本科学未来館の科学コミュニケーターの活動の中心は、来館された方々と「対話をする事」です。単純に科学的な成果や展示物について解説するだけではなく、もう一歩先を目指した「対話」を心がけています。科学の成果や法則が社会の中で「どのようにとらえられ、どう生かされているのか」、場合によっては「どのような問題を生んでいるのか」ということについて、来館者の皆さまとディスカッションするようなどころまで持っていきたいと思って活動しています。

また、ミュージアムなので、当然のことながらいろいろな展示物を作ったり、そのための取材を行ったり、大小様々なイベントを開催しています。インターネットのサイトでブログやツイッターを利用し、情報や未来館の考え方を発信するのも活動の1つです。



日本科学未来館

- ー 「対話」というキーワードが出てきましたが、単に話をするだけでなく、研究の成果を伝えるために展示物を作ったり、シンポジウムのようなイベントを開いたり、いろいろな方法でコミュニケーションを図るお仕事なんですね。科学コミュニケーターの皆さんはそれぞれ専門分野をお持ちなんですか。

日本科学未来館では現在、約50人の科学コミュニケーターが活動しています。やはり修士や博士など、ある程度の研究経験を持ったスタッ

フが多いのですが、必ずしも科学的な研究分野の出身というわけではありません。中にはコミュニケーションの手法やあり方について研究していた者や、芸術大学の出身者もいます。科学分野以外の専門でも、研究職の経験をきっかけに科学コミュニケーションに興味を持ったという者もいます。

ー 先生は、どうして科学コミュニケーターになられたのですか？

私は生物学が専門で、以前は製薬会社で基礎研究をしていました。結婚を機に家庭と研究職のワークライフバランスを考えるようになったのと、同時期に研究職以外のポストへの異動の打診もあり、転職も含めて検討していた時に、未来館の科学コミュニケーターという仕事に巡り会いました。以前から理科教育のようなことに興味があって、教育産業に携わったり、教師として活躍している大学時代の同期と交流していく中で、実際に仕事を手伝わせてもらったりもしていました。興味があったうえに、もう少しやってみたいという気持ちもありましたので、未来館の科学コミュニケーターというのが、その気持ちに通じているのではと思い転職をいたしました。現在、科学コミュニケーターの活動を始めてから8年目に入ったところです。

ー 科学コミュニケーターの目から見て、「エコチル調査のここが興味深い」と思うポイントを教えてください。

興味深いと思う点は二つ。一つ目は13年間に10万人を追跡していき、集められたデータから新しいことが分かってくるということです。エコチル調査によって得られるデータは、最近よく耳にする「ビッグデータ」と言われるような、膨大なデータになると思います。そこから何が発見されるのか、とても興味をそそられますね。

また最近、「先制医療」と呼ばれる分野が注目を集めていますが、症状が出てから対処するのが難しいものに対して、先手を打っていく医療を研究するためには、胎児期や乳幼児期から何が起きているのかを知ることが大切なのだそうです。そういう意味でも胎児期から継続して行うエコチル調査に注目しています。

ー 森田先生は研究者であると同時に、小さなお子さんを持つお母さんでもあるとのことですが、母親の立場からエコチル調査に期待される

ことはありますか。

今の時代、子育てをしていて何か困ったり、迷ったりした時はインターネットで検索すればさまざまな情報を瞬時に集めることができます。しかし中には信憑性が疑われる情報もあり、根拠がない情報には返って不安にさせられることもあると思います。エコチル調査によって科学的な根拠が見いだされ、根拠に基づいた情報を発信していただけるのではないかと期待しています。

- ー エコチル調査をもっと多くの人に知ってもらうためには、科学コミュニケーションの視点が重要だと思います。これからどのような展開が考えられるでしょうか？

科学コミュニケーションが網羅する範囲は広いです。情報を正確に伝えていくことに加えて、発信した情報が社会的にどのような意義を持っているかを考えていくことまでが含まれます。エコチル調査の参加者さんたちは調査の目的を理解し、賛同されて参加を決められたと思いますが、その当事者の方々が「この調査は意義があるんだ」と思い続けていくことができれば、成果も出てくるのだと思います。さらに、その成果は、「自分たちが真摯に取り組んだからこそ得られたもの」という実感をもっていただけるような働きかけをしていくことが大切なのではないのでしょうか。そのためには情報そのものをただお返しするだけではなく、その情報にはどういう意義があるのかということまできちんと伝えることが大切だと思います。

また参加者さんたちを取り巻くサポーターの方々を増やし、理解を深めていただくことも重要です。エコチル調査は大きなプロジェクトで、環境をテーマにした研究なので、当事者の方々だけではどうしようもないこともあると思います。当事者はもちろん、周りの方々に理解されてこそ生きる調査なのだと思います。

- ー 全国のユニットセンターでも皆さんに応援していただける仕組みづくりについて、試行錯誤しています。コミュニケーションの取り方について、アドバイスをいただけませんか。

実践の場では「相手の方の文脈に乗せる」という言い方があります。つまり、こちらが「伝えたい」事柄が、相手に「伝わる」ための工夫と

して、相手のこれまで歩んできた人生や興味を持っている分野や生活のありようを探り、その中のどこに乗せたら伝わるのか、ということを考えながら対話を膨らませていく。例えばシンポジウムに来場される方はどのような属性で、どんなことに興味を抱いているかによって、話のポイントの置き方や膨らませ方は変わってきます。

エコチル調査の場合、参加者とそうでない方が同時にいるのか、それとも別々にいる場なのかによって分けないといけない気がします。両者がいる場合にはどちらにも気を配る必要があります。参加者さんには「自分たちの協力により、成果が出てくる」という実感をもっていただけるような働きかけが重要になりますし、参加していない方に対しては、「直接参加していなくてもできることがある」という意義を見いだしてもらえるような働きかけが大切です。それぞれの立場の方にとっての意義が浮き彫りになるような分析があれば、戦略を練っていただけるのではないのでしょうか。

- コミュニケーションとは、相手によって異なる背景的なものを対話によって聞き出し、自分たちの伝えたいことを、どうやってそれに乗せていくか、いろいろな角度から考える作業なんですね。

ひとつのパッケージを用意して「どうぞ」と差し出しても、それがマッチする方としない方がいらっしやいます。商品ならば、ある程度マスで売れば良いという考え方ができますが、科学やコホート調査の成果などは、それではもったいない。できる限りきめ細かく、そしてひとりでも多くの方に伝わっていくこと、それが社会を変えていくことになるのではないのでしょうか。

- 最後に、エコチル調査に参加しているお母さんたちや、エコチル調査を応援してくださっているサポーターの方々にメッセージをお願いします。

エコチル調査は13年間にわたる追跡調査であり、まずは規模が維持されるということが重要だと思います。規模が縮小してしまうと、期待されていた成果が得られなくなってしまうかもしれません、非常にもったいない。参加者の方々には、ぜひ続けていただきたいと思います。未来館としてもエコチル調査は科学的な活動として興味を持っています。参加者の皆さまが続けやすい環境づくりや、認知を高めていくために、調査

に注目しつづけ、科学コミュニケーションができることを考えていきたいと思っています。

サポーターの方々には、精神的な支援の核になっていただきたいと思っています。マラソンでも、ランナーは沿道で応援してくれる方がいてこそがんばれることがあると聞きますよね。一人でも多くの人にエコチル調査を広めていただくことが、参加者の方々の続ける意欲につながると思いますし、サポーターなしでは続けていくことは難しいとさえ思います。サポーターの方には「仲間なんだ」という意識で、応援し続けていただきたいです。

— 貴重なお話をありがとうございました。今後ともご支援、ご協力をよろしくお願い致します。

(2015年3月9日)



■今月のエコチル先生

森田由子 先生

日本科学未来館 科学コミュニケーション専門主任
エコチル調査戦略広報委員



■インタビュアー

小田和早苗 先生

山梨大学大学院総合研究部附属 出生コホート研究センター 特任助手
エコチル調査甲信ユニットセンター事務局長